

【歴史点描 2】 三角公園

宍粟の森から滴り落ちた水は麓で憩う間もなく、中流では揖保川と名を変え約70km南下して末端の網干へ届きます。さしもの大河の流れも海岸部近くになると水勢を削がれ、多くの三角州を生みだします。その一つが「交流館」前辺りの川の中に横たわる三角州です。州を凌いで東へ南へと流れる流路は江戸時代、海の利便性を求めた大名たちがこの水路を境として自領地を定めたため丸亀・龍野・天領と異なる幕藩体制で明治を迎え、揖保川がもたらした自然の地形が魅力ある網干を育てたのです。「交流館」前の三角州は1958年、防災の観点から網干水門が設置されると土砂の流入はなくなり公園に転用されて「三角公園」が誕生しました。

西へ目を向けますと、浜田の西を流れる中川はむかし龍門寺川と呼ばれた時代があり、正徳元年（1711）の『苧屋村明細帳』によると龍門寺の西、中川一筋橋ありと記され、明治初期の図にはこの橋の南北に成長した三角州が認められます。ですがこの中洲の名は三角地名ではなく「ケンサキ」として地籍図に登録されています。苧屋では漁業を^{なりわい}生業とする家が多く、三角州を「ケンサキ^{いか}烏賊」の姿に重ねたのかもしれませんが。